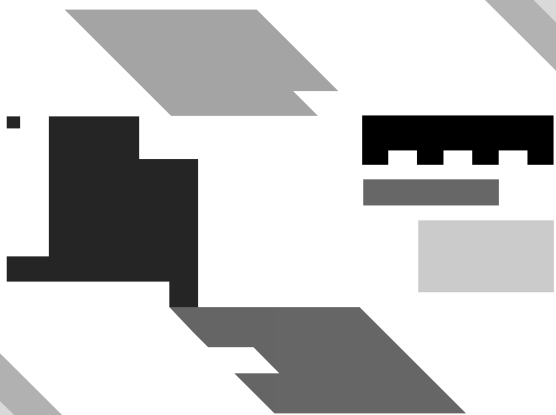
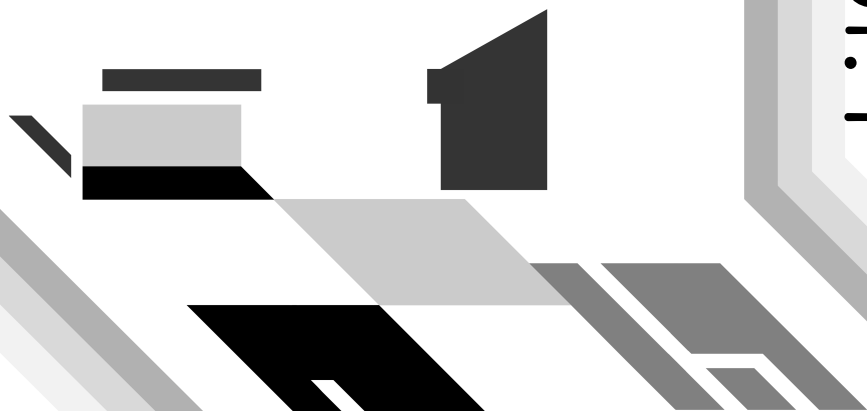


みんな

Vol.1



2018
琉球大学文芸部

【お知らせ】

文芸部のメールアドレスが新しくなりました！

ryukyu.bungei@gmail.com

この『みんな 第一号』の奥付に書かれている連絡先のメールアドレスは発行当時の旧アドレスです。間違いないようお気を付けください。

みんな

平成三十年・第一号

みんな 第一号 目次

詩

「シネマ」

常川空雅

……
6

「我 汝」

……
10

「存在証明」

ザベス

……
12

「馬鹿じゃないの」

……
14

「卒業」

……
17

散文

「彼女の想いを紡ぐ」

金城晃帆 …… 22

「赤い墓」

カネミツ …… 36

「BODAI」

南野 研 …… 72

（「BODAI」は横書きの作品です）

あとがき

…… 73

（装丁 常川空雅）

詩

シネマ

レッド グリーン ブルー

光のメロデー

流離う風

さらり

ゆらり

体に沁みる

滲む私

常川空雅

溶ける世界

昨日という日の

あなた越しの

心の中の

心の中の

私の中で

世界が生きる

レッド グリーン ブルー

光のパウダー

漂う雲

ざらざら

つるつる

顔に触れる

彩る私

弾ける世界

明日という日の

ガラス越しの

鏡の中の

鏡の中の

世界の中で

私が生きる

レッド グリーン ブルー

光のヴェール

超えていけ

ここから

あそこへ

手を伸ばす

私はいる

世界はある

今日という日の

永遠の遊びを

あなたと共に

世界と共に

私は生きたい

生きていきたい

存在証明

ザベス

できれば世の役に立ちたい
そのために勉強だって頑張ってる
だけど

資源を消費しているだけの
今の私に

有用性は見つからなくて

君が消費している資源は

未来への投資なんだよ

そう励まされたって

世の役に立つ未来の自分を
想像できない

それでも私は

今日も生きていて

たぶん明日も生きている

だって

地球は工場じゃないから

不良品があってもいいと思うの

少しの余分も許されない

窮屈な世界じゃないでしょう

ここは

馬鹿じゃないの

ザ
ベ
ス

ある人に

死ねと言われたけれど

自分以外の

誰かが

何かが

私を殺してくれるとでも

思っているのかしら

自分の手は汚さずに

けれど自分の思い通りになんて

馬鹿じゃないの

けれど

振り返ってみると

私もあの人と同じかもしれない

上手くないことがあつて

私なんか死んでしまえばいいと

自分で自分を殺せなくせに

自分以外の

誰かが

何かが

私を殺してくれるとでも

思っているのかしら

馬鹿じゃないの

そう思うとなんだか

私の中にあつた

「私なんか死んでしまえばいい」が

すつと消えていった

なんだかおかしくなつて

笑ってしまった

卒業

ザベス

いじめ調査アンケートの

私たちはいじめを

絶対に許しません

という文言が

機械的な気がして

怖かったとか

小さな講義室の

机に彫られた

珈琲と和食の相合傘で

叶わない片想いの物語を

思い浮かべて

涙目になったとか

台風が通り過ぎた後に

廊下を歩きながら

切り取られた青空で

台風一過を感じて

寂しくなったとか

どうでもいい記憶

ちっぽけな記憶

それでも

もしかしたら

詩になるかもしれない経験

ここを去るということは

ここで感じられることを

捨てるということ

大人になったときには

捨てることができないうそれらを

捨てたくて捨てたわけじゃなくて

奪われてしまったような気がした

散文

彼女の想いを紡ぐ

金城晃帆

女の子の一人が立ち止まり、僕を手にとって、言った。

「このシャーペン可愛い！」

暖かい、春のような笑顔を、その優しそうな顔に浮かべて。

それが僕と彼女の出会いだった。

僕は彼女の暖かい手の中から、その笑顔を見上げた。彼女の笑顔を見ると、どこかよくわからないけど、確かにどこかが暖かくなつた。

しかし彼女はすぐに笑顔を曇らせてしまう。

「でもお金ないから買えないや」

そして僕は元の場所に戻された。暖かさはなくなつて、僕は再び無機質な空気に包まれる。

「お金貸そうか？」

僕が彼女と出会ったのは、ある年の冬だった。天井には、処分大特価の紙。僕は一人、売れ残っていた。今日が過ぎれば売れ残った者たちは捨てられてしまおうらしいと、店員の会話から理解した。

僕が彼女に出会ったのは、そんなとき。

二人の女の子が向こう側から歩いてきて、僕は祈ったんだ。

お願い、僕を見て。僕を買って。

今までは祈り虚しく通り過ぎていくだけだったが、そのときはじめて祈りが通じた。

そばにいた女の子が言うが、彼女はそれを笑って断ってしまう。

「ううん。大丈夫だよ、ありがとう。」

そして二人の女の子は去っていく。

また駄目だった。

なんで僕は誰にも買ってもらえないんだろう。周りの皆が買われてどんどんいなくなっていく中で、一人だけ売れ残って。このまま誰にも必要とされずに捨てられてしまうのだろうか。

そして、閉店三十分前の音楽が鳴り響く。ゆったりしていて、少し物悲しくなる音楽。

諦めて、意識を手放そうとしたとしたそのとき。足音が近づいてきた。軽く走っているような足音だ。

ふいに足音が途切れ、僕の前で止まった。

「よかった……まだ残ってた。」

そう言って微笑んだのは彼女の友達だった。冷たい手に包まれ、僕はレジまで連れていかれた。

やっと買ってもらえる。これで捨てられないですむ。

レジではいくつかの会話が交わされて、僕は真っ暗な中に入れられた。最初は喜びで高揚していたが、やがて安堵に包まれ眠りについた。

それからどれほど経ったのか。僕はザワザワという音で目を覚ました。そこはまだ暗いままで、僕は自分が目を開いているのか閉じているのかわからないほどだった。やがて、ザワザワという話し声が近づいてきた。ガサガサ

という音が僕の間近でして、光が差し込む。光が差す場所にあったのは、彼女の顔だった。僕を見た瞬間、彼女の顔がほころんだ。

「お誕生日おめでとう、はるちゃん！」

僕を買った女の子が弾んだ声でそう言った。僕がもといた場所は、雑然としていた。色があふれかえっていて、けれど色彩がどこか欠けている感じがして、冷たかった。この部屋は真逆だ。オレンジを基調として色が統一され、整然としている。そして何より――暖かい。その暖かい部屋の中で、彼女は数人の女の子に囲まれて、嬉しそうに笑っていた。

しばらくして、一人が部屋から出ていった。そして二人減り、三人減り――。やがて部屋の中には彼女一人だけになった。彼女は一瞬寂

しそうな表情を浮かべたけれど、僕がいる場所を見るとまた嬉しそうに笑った。

彼女は淡いきれいな色をした紙と鉛筆を取り出すと、机に向かった。そして何かを書こうとして、僕を見て――やめた。代わりに少しいたずらっぽい笑みを浮かべ、僕を手を取った。僕から文字が紡がれる。それは彼女の想いを形にしたもので、僕は初めてのその感覚に、喜び、震えた。

ゆっくり、ゆっくり、一文字一文字、丁寧に。愛おしむように。

彼女は『手紙』を書いた。

真理ちゃんへ

お誕生日会に来てくれてありがとう。真理ちゃんが来てくれて嬉しかったし、楽しかったです。プレゼントもありがと

う！早速、真理ちゃんがくれたシャープンを使ってこの手紙を書いています。そこまで書いて彼女は、僕を見て笑った。本当に嬉しそうに、幸せそうに。

二人で買い物に行ったあの日、私とバイバイしてからわざわざお店に戻って買ってくれたのかな？それで多分、私が気にしないように誕生日プレゼントとしてくれたんだね。そんな優しい真理ちゃんが大好きです。

これからもずっと友達でいてね。

陽より

彼女は照れくさそうに笑うと、僕を机の上に置いた。

これが、僕が彼女の想いを紡いだ一回目。

僕は彼女とずっと一緒だった。にも関わらず、僕が「僕は彼女のものになったんだ」と理解するまでに時間がかかったのは、『プレゼント』という概念をよく理解していなかったからだ。僕は彼女が書く手紙やノートを通して、人間にとつての常識や、人の感情の名前、人がどういうときにどう思うのか、という知識をどんどん吸収していった。その中で『プレゼント』という概念や、僕は彼女のものになったということを理解していった。彼女の名前が「陽」と書いて「はる」と読むと知って、彼女にぴったりの名前だなと思ったのも、この頃だ。そうして何も知らない幼い子どもだった僕は成長した。

やがて僕は発見をした。彼女が僕を持っているとき、彼女から僕に何かが流れ込んでく

るのだ。それは形がなくて、不安定でころころ変わっていく。ぼんやりとしていて、けれどたしかに存在するもの。それは『心』だった。それに気づいたときは、楽しくて仕方がなかった。人の感情について、知識ではなく感覚で知ることができたから。

彼女はいつも、五時間目の授業のときにふわわとした気持ちになる。そのとき僕から紡がれる文字はたいていがミミズがのたくったような文字か、もしくはもはや文字として機能していない曲線の集合体だ。しばらくすると頭がかくつと垂れて、一瞬後にはふわふわとした気持ちは霧散して、ドキドキした気持ちになる。頭を上げながら何度もぼしぼしとまばたきをし、きれいなしっかりとした字を書くようになるが、またしばらくするとふ

わふわした気持ちになって、ミミズがのたくったような文字を書く。

その繰り返しだ。

ふわふわした気持ちは「いい気持ち」で、ドキドキした気持ちは「焦り」というらしい。彼女のしていることは「居眠り」といって、いけないことらしいが、あんなにいい気持ちになるのに何が駄目なのかよくわからない。「焦る」のはあまり気持ちよくないから駄目なんだろうか。

僕には理解できないことだ。

彼女が一日のうちで一番幸せになるとき、それは一人の男の子を見たときだ。胸がぎゅつとなつて、ドキドキしてザワザワして、けれど焦ったときの不快感はなくて、ふわふわと

して嬉しい気持ち。最初はこの気持ちを何と呼ぶのかわからなかった。分かったのは、『国語』の授業のとき。彼女がその言葉を書いて、

あの男の子をちらっと見て、またあの気持ちになったから、僕は直感でわかった。

この気持ちは「甘酸っぱい気持ち」というんだ、と。国語の物語のように、「頬が朱色に染まった」りはしないかと彼女の頬を見つめたけれど、肌のままだった。もしかしたら、僕が肌色だと思っている色が朱色なのかもしれない。それか、僕が頬だと思っている場所が間違っているのかも。

人の世界は不思議だらけで、僕にはわからないことがたくさんあった。わからないことは知りたいと思っただし、知ることは楽しかった。

でも、楽しいことばかりじゃないんだと、僕はわかっていなかった。

一時期、彼女の元気がないときがあった。彼女は僕や僕を買った女の子を見る度にチリチリとした気持ちになった。前は僕を見たら笑顔になって、暖かい気持ちになっていたのにどうしたんだろう。女の子とケンカでもしたのだろうか。

そう思っているうちに、チリチリとした気持ちはモヤモヤとした気持ちに変わっていった。春のような暖かい笑顔も浮かべなくなった。たまに笑うことはあっても、それは口だけのぎこちない笑顔だった。そして彼女は僕を買った女の子と話さなくなった。彼女だけで

なく、彼女の他の友達も。同じころ、僕は彼女に使われなくなった。

それから僕を買った女の子は、休み時間いつも一人で椅子に座っていた。何かをこらえるような、張りつめた顔をして。そしてそんな女の子を見た彼女もまた、泣きそうな顔になった。それでも決して女の子に話しかけようとはしなかった。「どうしたの？」と聞きたかったけど、聞けなかった。僕には――僕達『物』には――声というものが存在しない。僕は彼女の力にはなれない。相談にのることも、慰めることも、励ますことも。自分の無力さに悔しさと悲しみを感じて、僕はいつの間にか、彼女のことを大切に思っていたんだな気づいた。僕は彼女に笑ってほしかった。

そんな状況が変わったのは、ある日のお昼休みだった。僕が入っていた筆箱に光が差し込み、その先にはいつもと違い知らない女の子がいた。その女の子は「これ可愛いー」などと言いながら筆箱に入っていた文房具たちを机の上に並べていく。僕の番がきたとき、その女の子は言った。

「これ、あいつからもらったやつ？」

その女の子の手の中から、椅子に座った彼女の姿が見えた。またあのぎこちない口だけの笑顔を浮かべて、彼女は答える。

「うん。最近使っていないけど……」

その女の子から流れ込んでくる気持ちとはとても冷たくて、体が凍ってしまうかと思った。その女の子は言葉を続ける。

「前から思ってたけどさあ、ありえなくない？ セール品誕生日プレゼントにするとか。さすが貧乏人って感じじ〜。」

傍にいた別の女の子が言う。

「ていうか、駄目じゃん、陽。真理からもらったシャーペン持つてるとか」

僕を持っている女の子は、それを聞いて一層冷たい気持ちになり、残酷な笑顔を浮かべた。

「そーそー、捨ててあげる。」

そう言うのと、近くにあったゴミ箱まですたすたと歩いて、ゴミ箱の上で僕をぱっと放した。彼女の「えっ」という声が小さく聞こえた気がしたが、女の子たちの笑い声にかき消されてしまった。青いゴミ箱の底からは何も見えなかった。彼女が僕を救い出してくれるこ

とを期待したけど、ゴミ箱の中で時は過ぎ、僕の上にはゴミ——主にティッシュだった——が積もっていった。結局僕は捨てられてしまふのか。僕には流す涙なんてないけれど、もしもあつたらきつと泣いていたと思う。彼女の憂鬱の理由はなんとなくわかったけど、どうすることもできないばかりか、彼女の助けを待つかできない自分が情けなかった。やがてガサガサという音がして、いよいよ捨てられるのか、と覚悟を決めた。が、ゴミがかきわけられ、馴染みのある手が僕に触れた。僕の心——あるいは、僕に流れ込んできた彼女の心——に喜びが満ちた。気づくと目の前で彼女が泣いていた。そこは夕日が差し込む誰もいない教室だった。あの女の子達にばれないように放課後になってから来てくれたのだろう。

彼女が、嗚咽の隙間からごめんねと呟いた。彼女から流れ込んでくる心に身を引き裂かれるような心地がした。なぜ彼女がこんなに苦しまなきやいけないのだろう。やりきれない気持ちでいると、ふいに彼女の背後から冷たい声が出た。

「陽？ なにしてんの？」

その声を聞いて彼女の肩が跳ね、居眠りするときの何倍もの焦りとともに振り返った。

「ゆうちゃん……」

彼女の肩越しに見えたのは、僕を捨てた女の子だった。その子は僕を見て嘲笑うように言った。

「そのシャーペンがそんなに大事？」

彼女は一瞬ひるんだが、僕を両手で握りしめ、女の子の目を見て言い返した。

「そうだよ、大事だよ。私、……幸輝くんと楽しんでそうに話せる真理ちゃんに嫉妬しちゃって、一緒に悪口言っちゃったけど、でも私はやっぱり真理ちゃんのこと大好きだし大切だから。……それに、いじめとか、よくないよ！」

「つ別に、いじめじゃないし！ 好きにすれば」

女の子は一瞬鼻白み、それだけ言うど踵を返して去っていった。彼女は安堵してその場へへたりこみ、僕を見て言った。

「ありがとう」

それからはまた、彼女は僕を買った女の子と一緒にいるようになった。二人だけになったけど、彼女は以前より遥かに幸せそうだった。陽だまりのような笑顔もまた浮かべるようになった。あの「ありがとう」がどんな意味なの

か、僕に向けられたものなのかわからなかったけど、少しでも彼女の役にたてたなら幸せだと思った。

ああ、また幸せな夢を見ていた。

僕は暗闇の中で目を覚ました。彼女は僕を大切にしてくれていたけど、ある日を境に僕はずっと暗闇の中にいた。最初のうちはあの日のように彼女が探し出してくれないかと期待したが、長い長い時が経って諦めた。きっと彼女は僕のことなんて探してない。捨てられたか、忘れられたかのどっちかだ。とても寂しくて、悲しかった。彼女との幸せな日々を過ごし

たあとの一とぼっちの時間は、あの女の子に買われる前よりもずっとずっと寂しかった。僕はこんなに辛い思いをするくらいなら、買われずに捨てられたほうが良かったと嘆いた。でも、彼女との思い出を夢に見て、思い直した。彼女と出会えて、僕は幸せだった。彼女との日々はかけがえのないものだ。たとえこの先ずっとこの暗闇の中で生きていくのだとしても。

幸せな夢の続きを見よう。僕は目を閉じた。

僕が彼女に使われるのは授業のときと、宿題をするときと、友達に手紙を書くとき、そしてもうひとつ。物語を書くときがあった。彼女は剣と恋の物語を書いていた。彼女が物語を

書くとき、僕はとてもワクワクドキドキさせられて、とても好きだった。

ある日彼女は一枚の紙を見つめていた。線と文字が書かれた紙だった。彼女は僕を持って、そこに「小説家」と書いた。そのときの彼女の心にはもやもやとした迷いがあつて、しばらくその文字を見つめていた。もやもやが膨れ上がり、はじけたとき、「私なんて」と呟きもれた。そして彼女は書いた文字を消し、「国語の先生」と書き直した。それから数週間、物語が書かれることはなかった。

ある日彼女は家に帰ってきてあの紙と消しゴムと僕を取り出し、あの日書いた「国語の先生」という字を消して、再び「小説家」と書いた。今度は、決意と希望に満ちた気持ちで。そ

れから彼女は今までよりも頻繁に物語を書くようになった。

その理由がわかったのはまた後日のこと。その日僕が彼女の部屋の机の上に出されたとき、机の上には見たことのない新しい便箋があつた。彼女が僕を手を取ったとき、「甘酸っぱい気持ち」が流れ込んできた。そして僕から紡がれたのは、「ラブレター」、もしくは恋文と呼ばれるものだった。

幸輝くんへ

実は幸輝くんのがずつと好きでした。きっかけは多分、初めて幸輝くんと同じクラスになった年の四月、私が教科書忘れちゃったことにすぐに気づいて見せてくれたことです。それから気づくと幸輝くんのことを

目で追うようになりました。幸輝くんはいつも、誰かが困っていることに一番に気づいて、一番に駆けつけていました。そんな優しい幸輝くんが好きです。私が進路に悩んでいたときも、声をかけてくれてありがとう。小説を読まれちゃったのは恥ずかしかったけど、面白いつて言ってもらえて勇気が出ました。教えてくれた「成功とは努力すること」「才能なんてなかったってそれを越える決意の凄みを見せてやれ」という誰かの名言も、ずっと胸に刻んでいます。ありがとう。

これまで何回も彼女の想いを紡いできた中で、一番時間をかけて悩みながら書いたものだった。彼女はドキドキしたり、もやもやした

り、ふわふわしたり色々な気持ちになりながら書いていた。

そこまで書くと彼女は僕を置いて不安げに「長いかな：？」と呟いた。そしてそのあとも何枚も何枚も便箋を使ってラブレターを書き直した。

彼女がようやく納得して封筒に入れた手紙を、しかし渡さずじまいだったことを、僕は知っている。ラブレターを書いて何ヶ月も経ったあとも、そのラブレターを見て悲しい顔をしていたから。僕はその度に彼女が幸せになりますようにと願っていた。

ああ、彼女は今、幸せだろうか。今もまた、春のような暖かい笑顔で笑っているといい。

カシ、……カシヤツ

すぐそばで何やら音がして僕は目を覚ました。しばらくカチャカチャという音が続いたかと思うと、ぎいっと鈍い音とともに光が差し込んだ。聞き覚えのある弾んだ声が言う。

「開いた！」

そこには女の人と男の人がいた。

「ありがとう幸輝、手伝ってくれて。」

「いいってことよ。」

女の人がこれもまた見覚えのある笑顔を浮かべて、僕を手にとった。

「久しぶり」

いたずらっぽく笑って話す彼女からは、満ち足りた気持ちの流れ込んできていた。

彼女がダンボールからノートを取り出し机に向かうと、男の人から声が飛んでくる。

女の人は、成長した彼女だった。僕の心が喜びで満ちた。ぼくのこと、ちゃんと覚えていたんだ。彼女は今も、春のような暖かい笑顔を浮かべていた。男の人が口を開く。

「それが真理からもらったやつ？」

「うん、そうだよ。」

「……なんか妬けるな。」

「え？」

「錆びて開かなくなった筆箱、それがあるから捨てずにとっといたとか、……俺があげたものもそんなくらい大事にしてる？」

「してるよ」

「こら、荷ほどきしなさい！ただでさえそれ開けるのにめっちゃ時間使ったんだから」

焦りながら彼女は答える。

「ちょっとだけ待って。今思いついたのメモしてるから。」

男の人は「へえ」と眩き、尋ねた。

「今度はどんな物語？」

彼女は一瞬考えて、僕を見ていたずらっぽく笑って答えた。

「私とこの子の物語」

完

赤い墓

カネミツ

「マリアさんのおじいさんは学者だったのかね？」

車に揺られながら、マリアの隣に座るブラリツが語りかけた。

「祖父の両親は開発者だったようです。パラノマ社に勤めていて、ミリ発で今も使われる製品に携わっていたとか」

「パラノマ社か！それはすごいな。おじいさんのご両親は素晴らしい発明家の一人だったんだね」

ブラリツの瞳が輝く。直接知っている訳ではないが、家族が褒められるのは純粋に嬉しく、マリアの顔も自然と緩んだ。

「そう言って貰えると祖父も喜ぶと思います。近所に住んでいた家族も、親がパラノマ社に勤めている家族がほとんどだったそうですよ。祖父は隣の家の友人と両親を真似て発明家を気取って、物を作っては遊んでいたと言っていました」

「それは素晴らしい生活だ」

数十分ほど車に揺られていると、ピコンピコンというアラーム音が車内に響いた。助手席に座るロサレヌの端末から鳴っているようだ。

「あ、着いたかな？」

「ロサレヌさんちよつと貸してください、座標を確認してみます」

ロサレヌが端末をいじると音は止まった。

運転手のアミルも車を止めて端末を確認する。

「着きましたね！ここからですと、あのルブボラの木がいくつか並んでいる所から少し手前の所です。えっと、オレンジの壁の建物側です
ね」

「降りて準備しましょうか」

車を降りて、積み込んだ機材を運び出して準備をする。

ツシ星から、遠いミリ星まで最速の船でも一日半。ミリに着いてからは忙しなく車移動だ。普通、ツシからわざわざミリまで遺跡調査に行く研究者はいない。時間もお金もかかる

し、何より体力もいる。それでもマリアは行かなければならなかった。行く必要があった。

「マリアさんのおじいさんがミリ人なんですよね？ミリ戦争の生存者なんですか？」

準備をしながら、アミルはマリアに話しかけた。

「そうなるね。でも、爆撃が始まった時はたまにミリにいらなくて大丈夫だったって聞いてただけだ」

「だけど？」

不思議そうにアミルが聞きなおす。

「本当はミリにいたって、亡くなる前に私に言ってきたの」

アミルが驚いた顔をマリアに向けた。当然の反応だと思う。

ミリ人であるマリアの母方の祖父は、三年前に亡くなっている。祖父がミリ人であること自体は幼い頃から知っていた。その後成長したマリアは、スクールの歴史の授業でミリが滅んだ星だと知り、祖父の人生についても知るようになった。

祖父はバラノマ社に勤める両親の元に生まれ、友人と物作りをしては遊び、皆で自然と開発者を目指していた。ミリのスクールの卒業して、地元の企業で友人らと共に開発者としての人生を始めようとした、その直前のことだったという。

ある日突然、ミリの地表全体が一瞬にしてガスに覆われ、それから五分も経たずにミサイルが撃ち込まれ始めた。

多国籍戦闘集団による完璧な奇襲だった。星を囲むように止まった四艘の不審な船に政府の治安部隊が警告文を送った頃には、既に二十数発のガス弾が撃ち込まれていた。

ガスは当時の最新型のもので、その時点で外に出ていた人は皆即死、屋内にいた人も多数命を落としたらしい。その後に爆撃も始まり、なんとか治安部隊が他国の援助も得て戦闘集団の船を停止にまで追い込むまで丸一日かかったという。

ミリが高度なテクノロジーを持っていたことはよく知られていたが、ミリが国家的にそのテクノロジーを悪用して覇権を狙っている

との情報を得たと、捕らえられた戦闘集団は言った。勿論、事実無根だ。星を壊滅させるしかない、上手くやれば報酬も出す。そう戦闘集団へ告げたのはミリとも国交を結んでいたソロウという軍事国家の急進派のメンバーだった。

戦闘集団は全員確保され解体、ミリは生き延びたわずかな人々も散り散りになり、ソロウも厳しい制裁を様々な国から受けて人口の流出が止まらず、今や国としてはほとんど機能していない。一部の人々の過ちで二つの星が滅んだのだと人々は言った。

マリアの祖父はというと、単身ミリを離れていた際突然祖国が攻撃され天涯孤独の身になり、帰るにも帰れなくなってしまうという。様々な仕事をしながら星を転々とする中

でツシ人の祖母と出会い、最終的にツシで生活を落ち着けた。そこでマリアの母も生まれ、ツシ人の父と結婚し、マリアが生まれた。

少なくともマリアはそう聞いていた。しかし、祖父の語る自身の歴史には偽りがあったという。それを知ったのも三年前だ。

祖父はマリアにだけ話すことだからな、と前置きして一通り話した数か月後に亡くなった。マリアは大好きな祖父が亡くなったことに勿論ショックを受けたが、それ以上に祖父の遺言が心に残り、調査への準備を始めたのだ。

遺言はマリアにとってあまり素直に信じきれない内容だった。祖父の言葉が正しければ、祖父は攻撃された瞬間もミリにおり、友人の墓まで作ったという。その後ミリを出たと

いうのだ。そしてもし遺体が残っていたら自分の墓の隣にきちんと埋葬してほしい、と。マリアに言った。

真実かどうか、ちゃんと自分の目で確かめたい。このために協力してくれた人も大勢いる。その人々や、自分を信用して話してくれた祖父を裏切りたくはない。

マリアは機材の荷台を押しながら、ルブボラの木を見つめた。

まず、ブザーを一度鳴らす。次はブザーのボタン自体をドアノブのように回す。右に一回転、左に二回転。特に出っ張りもない小さなボ

タンをつまんで回すのは少し難しい。そして二度ブザーを鳴らす。

「来たよ、ロト。入れてくれ」

言い終わったら一度ブザーを鳴らして返事待たせ。

『やあアスキー、待ってたよ。入って』

アスキーはブザーのすぐ下をゆっくりと押した。壁の一部が正方形に凹み、奥まで押し切るとカチツと音がする。ゆっくり指を離すと壁も戻っていき、一切の裂け目がなくなるとそこはただの壁に戻った。

これでやっと隣のドアの鍵が解除される。アスキーはドアノブをゆっくりと握ってドアを開けた。

アスキーの家はロトの隣にある。両親が家を建てた時お互いに五歳であり、出会ってすぐに仲良くなった。それ以来よく二人で物作りをして遊んでは互いの家を行き来し、家族ぐるみの付き合いを続けている。

ロトの家の庭にある、大きな箱型の建物がロトのラボである。十年ほど前ロトがセカンドスクールを卒業した時にロトの両親がプレゼントしたものだ。

元は物置だが、年々建物自体にもロトの手が加えられていくのでセキュリティが高くアスキーが入るのにも一苦労だ。ロトは幼馴染にも容赦しない。

ラボには玄関や廊下もないのですぐに部屋の全貌が見える。ロトはラボの中央に胡坐をかいており、アスキーはその向かいに座った。

「それ？新しいやつって」

ロトの背後には、横長の白い簡易シェルターのようなものがある。先月行った時にはなかったように思えて、アスキーはそれを指さしながらロトに尋ねた。

「そう、完成したから見せたかったんだ。これは一応簡易的なシェルターの役割を果たすようになってる」

ロトは自身の肩越しに背後のシェルターを見上げた。シェルターの側面の上部に手のひらほどの丸い小窓がある。その下には小さめのドアのようなものがあつた。

「上に小窓があるだろ、それを二回叩いて」

ロトがやって、という顔で見つめてくるので、アスキーは言われた通り小窓を二回叩いた。

「その下の引き戸が入り口なんだけど、グリップを握りながら小窓を二回叩いて」

アスキーは右手でグリップを握り、左手を伸ばして窓を叩いた。ピコン、という音と共に窓枠が黄色く光る。

「これでアスキーを認識したから、出入りは自由になったよ。後はグリップを離して、二回強く握って一度離して次握った時は開く」

「お前の作るやつってめんどくさいよな」

「アスキーのはセキュリティが足りなさすぎるんだよ」

言い合いながら言われた通りにグリップを握ると鍵の解除音が聞こえ、そのまま横にスライドさせるとドアは開いた。

だいたい二人が横になってもある程度余裕はありそうな広さだ。マットが敷かれている

床に座っても、頭上に十分余裕はありそうに見える。外からの見た目よりは広々とした内装にアスキーは驚いた。

「すごいな、思ってたより広い」

「簡易的なシェルターは狭いのが多いから楽な方がいいよね。壁はずっと棚の裏に置いてたやつを使った」

ロトは壁掛け時計の下にある棚を指さす。アスキーとロトの両親は同じ会社の開発部に勤めていて、会社での開発が終わって余った資料などを譲り受けることができた。これもその一つになる。多めに発注したものの結局使わず、有り余ってしまった板状のソロニウムだ。

「金属類でもソロニウムは丈夫だからね、シェルターにいいだろうと思って」

「ソロニウム製のシェルターって……高価過ぎて多分どこも製品化してないよな」

「まともに作ったら誰も買えない値段になるよ。ほら、早く靴脱いでから入って」

アスキーは靴を脱ぎ、身を屈めて中に入った。そのままロトを待っていたが一向に入って来ない。

「入らないの？」

「いろいろ試したいから外から見てる」

「はいはい」

内側にもグリップがあり、横に引いてドアを閉めると鍵が閉まった。オートロックになっているようだ。

『聞こえる？』

ロトの声が聞こえ、アスキーは小窓の横にスピーカーがあることに気づいた。

「聞こえる。マイク付けてるのか」

『外部から連絡できるようにね。扉のどこにあるボタンを押しながら喋ったら話しかけることができる。外側にもあるよ。どちらかが押せば反対側のマイクも自動でオンになって、一回オンになればボタンを離して大丈夫。そっちからやってみて』

アスキーはボタンを押しながら話しかけた。「どうだ、ロト。でもこれどうやってオフにするんだ」

『ボタンを二回押せばオフになる。さっき俺オフにしたんだけど、今アスキーがオンにしてちゃんと聞こえるからマイクとスピーカーはクリアだ。次は箱を見てみて』

アスキーは周囲を見渡した。隅の方に低い箱が三つある。順番に開けると、一番左の箱は

食料、中央はガスマスクと目元保護用のゴーグル、右にはタブレット端末が入っていた。このガスマスクは見覚えがある。アスキーが作った物だ。

「だから前マスクの設計図くれって言ったんだな」

『しかも勝手にグレードアップした。このシエルター自体にも使ってる、最新型のガスにも対応できるクリーン機能にしたんだ。このクリーン機能は俺にしか作れないからな』

「ははっ、流石だな。入社したら発表するつもりなんだろう」

アスキーもロトも、数か月後には両親らと同じ会社へ勤めることが決まっていた。

『そのつもり。アスキーも入社したら製品化すればいいんじゃないか？このマスク』

「そうだな。……この端末は？」

『連絡用と情報収集のためかな。中に籠りっぱなしじゃ何もわからないだろ。暇つぶしにもなるし。多機能タイプの端末のボディを丈夫にした』

「食料は一週間分くらいか」

『一週間あればマスクで外に出れる程度にはなるんじゃないかと』

アスキーはシエルターを見渡す。アスキーから見て右の奥の方には横長の箱があり、左奥の壁の低い位置には扉付きの窓かドアのような、取っ手のついた丸い枠があった。

箱を開けると、中に入ったのは寝具とタオルだった。その下には水の入った小型のタンクが二つある。

「毛布とか全部わざわざ買ったのかよ」

『……違うよ、これも余ってた古い救急セットにあったんだよ。食料もそう』

「そっか。反対側の壁に窓みたいなのあるけど」

『それはドア。単座のポッドに続いているから狭いと思うけど入ってみて』

「ポッドだって？」

アスキーはそのポッドへのドアへ近づいた。近くで見ると、身を屈めて跨げばどうにか通れそうなサイズではある。アスキーは半ば四つん這いになるような体制で移動した。

『どう？行けた？』

「……単座のポッドって聞いた時にもしかして、とは思ったけどさ。これ俺が改造したやつだろ」

数年前のロトの誕生日に、隣の星に遊びに

行きたいと言っていたのでアスキーが一人乗りの小型ポッドを改造してプレゼントしたのだ。自動操縦の速度や時間を自由にいじれるようにした。目的地を入力して好きに調節すれば、早く着くにも、遅く着くにも自由である。

『これはアスキーのをそのまま使ってる。直接移動できるようにドアは付けたけど』

「シエルターに使うといいのかよ」

『いいよ、俺も何回か乗ったし』

「はあ……あげた側としては複雑だな」

『でも便利だよ。このシエルターである程度は過ごせるけど外に出れないってなった時にこれで脱出できる訳。食料とかこっち側に持ってきたらもっと快適』

「なるほど。このドアを閉めて両方密閉して、シェルターから切り離して出るんだろ？」

『その通り』

アスキーはシェルター側へ戻った。

「それにしても、何でこんなシェルターとか作ったんだよ？」

『……戻った？じゃあこれで最後のテストだから。壁の真ん中らへんにスイッチのパネルがあるから見て』

「？ああ」

壁に薄いケースが取り付けられており、蓋を開けると沢山のスイッチがあった。照明やクリーン機能など機材のスイッチから、隣のポッドを起動させるものまで、全てのスイッチがまとめてあるようだ。他にも時計やシェ

ルター内外の温度や湿度、大気レベルなどの基本的な情報も表示されている。

『基本的に自動でオンになるようにしてる。』

クリーン機能とかの有事の時必要なやつも物質を検知したらオンになるようにした。まあ全部手動でもできるけどね……あつちよつと待って、忘れてた、さっきのマスクつけてみて』

ロトが慌てて声をかける。

「マスク？何で？」

『俺がいじった時にフィット感が増すようにしたんだよ。俺は良かったんだけどアスキーはどうかと思って』

「はあ、まあいいけど」

アスキーは箱からガスマスクを取り出した。フィット感と言っても、アスキーが作った時

とほとんど変わらないように見える。首を捻りながらアスキーはマスクをつけた。

「……これ何が違うの？同じように感じる」

『待って、外さないでそのままつけてて』

「変わってくるのか？」

アスキーにはロトの声が心なしか焦っているように聞こえた。マスクくらいで何故そう焦るのだろうか、とアスキーは思う。

『まだつけてる？』

「つけてるって。どうしたんだよ」

『待ってよ、そのまま……あ、念のためもう暫くは外さない方がいいね。気を付けて』

「は？それって」

どういう意味、と続けようとした。その瞬間、ごとんと大きな音がシェルターのスピーカーから聞こえた。

「おい、何か落ちたみたいだぞ」

『……………』

返事がない。

「ロト？」

アスキーはシェルターから出るためドアのグリップに手をかけた。しかしドアを引いた瞬間ブザーが鳴り、鍵がロックされ外に出られない。

「おいロト！返事しろ！」

『……………』

何度引いてもブザーは鳴った。オートロックなら手動で解除すればいいのではと考え、スイッチパネルを見る。出入口のドアのスイッチをアンロックにしようと指を伸ばしたその時、アスキーは気づく。
クリーン機能がオンになっている。

つい先程、ロトは物質を検知したら自動でオンになると言っていた。それだと、「今は有事」ということになるのではないか。

アスキーは背中にどっと汗が流れるのを感じた。息苦しさなど全くないマスクを作った筈なのに、勝手に息が荒くなっていく。アスキーは落ち着け、と何度も自分に言い聞かせた。息を吸う。

「ロト！何があった、大丈夫か！」

何度壁を叩いても反応はない。

「くそっ、何なんだよ！」

アスキーは他のスイッチを確認することにした。クリーン機能以外にも、耐爆強化や防火システム、防火に基づく周辺のオート消火、耐震保護など、有事の際に必要と思われる装置はすべてオンになっている。

アスキーはロトの言葉を思い出した。マスクを念のためもう暫く外さない方がいいと、彼は言っていた。

「お前、わかってたのか」

アスキーにも今何が起きているのか全く理解できていないが、ロトはこれを見越していたのではないかと思わずにいられなかった。

とにかく外の状況を知らないといけない。

アスキーは箱から取り出した端末を起動させた。外部と連絡を取らなければ、とラボにある筈のロトの端末と通信してみようとした時だった。

ドオオン、という爆発音が響き、シエルターが激しく揺れた。同時にガシャンガシャンと棚が倒れる音も聞こえる。

アスキーはとっさに端末を放り投げて傍らの並んでいる箱にすがりついた。大きな揺れが収まって、ビリビリとした振動の余韻が残っている。シェルターの外にいるロトはどうなっているかと思うと、アスキーの胸に不安が広がっていった。

「ロト、大丈夫か！」

ずっと返事がないのはわかっていた。それでも認めたくなくてアスキーは声を張り上げる。

「頼むから返事しろよ！」

再び爆発音が聞こえた。音は小さく揺れもないため、今度はここから遠い所で何かが起こったらしい。となると、先程の爆発は随分近くであったということだ。ロトはどうなっているのかと、アスキーの顔は青ざめていく。

「なあロト、怪我とかしてないよな？お前も今の内にシェルターに入った方が」

瞬間、端末がけたたましく鳴った。ロトからの通信かと思えばアスキーは慌てて端末を手に取る。端末の通知は通信ではなく、速報だった。

『ミリにガス弾発射か、爆撃も開始』

『周辺に戦闘集団ザルガスの船多数』

「は……？」

『ザルガスがミリを攻撃』

『ミリにガス弾発射か 周辺の星への影響はない模様』

『既に死者多数？ 周辺の星も警戒を強める』

『異例の数値 大気警戒レベル九』

『ミリ政府警戒発令 支援を求める』

「どうしてこんなことが……」

アスキーは自宅へ通信してみた。両親は家にいる筈だったが、何度通信を試みても繋がらない。爆撃で何らかの損傷を受けているのだろうか。アスキーは深呼吸した。焦るな、と考えるしかない。もう一つ息を吐いたその時、端末に通知が来た。

ロトの端末からのメッセージだった。

「ロト！」

アスキーの不安な気持ちが少しだけ和らぐ。

ボイスメッセージが再生された。

『やあ。これは時間指定メッセージだから、別に今俺が喋ってる訳じゃない。正確にはこれの送信指定時間から考えると昨日の昼喋ってるってことになる』

大きな爆発音があった。バアン、という音と共にシェルターの壁が揺れる。何かシェルタ

ーの上に落ちたようだ。それでもアスキーは端末を落とさなかった。

『七年くらい前に二人でふざけて通信傍受端末作っただろ。覚えてる？二か月くらい前に久しぶりに見つけて、起動してみたんだ』

今よりも若くて、少し悪いことをしたくなった時だった。一般的な傍受防止を破るシステムを少しだけ二人で悪用、というか改造した。

片っ端から傍受するのではなく、防止装置の機密レベルが高いものだけをキャッチするようにした。傍受される側からすると友人間で少し秘密の会話をしているつもりでも、アスキーとロトには丸聞こえなのだ。これを使って暫く二人で様々な話を盗み聞きしては遊んでいたが、飽きて使わなくなっていた。

『ちゃんと起動できて、傍受もできた。それで俺何を聞いたと思う？宇宙空間上での、ソロウ人とザルガスのやり取りだった』

「それって、今の」

先程のニュースがアスキーの脳内を駆け巡る。

『あいつら、七年前の俺らでも傍受できるよ。うなしよぼい端末しか使ってないんだよ……まあ傍受されるとか思ってたんだろうけどさ。ソロウの急進派の奴だよ。よくニュースになってる』

「何でこんな攻撃してるんだよ」

返事をしてでも端末からも、シエルターの外からも何も返っては来ない。ただシエルターは揺れ、爆発音は止まない。

『話してる内容が理解できた時には驚いたよ。ザルガスに嘘の情報を売ってミリを攻撃させようとして、あいつら、ミリがテクノロジで宇宙の覇権を狙ってるって思ってるんだ。ありえねえだろ』

ドオン、とまた近くで爆発が起こる。続けてシエルターに何か細かい物がバラバラと当たった。

『それで、ミリに攻撃するための計画を立てた。とにかく、あいつらが本気でミリを攻撃するつもりなら、明日ミリは滅ぶ。滅ぶレベルの攻撃をしようとしてる』

シエルターに何かがぶつかり、大きく揺れた。どんなに物がぶつかって揺れても、シエルターが壊れる様子は一切ない。

『だから、急いでシエルターを作った。作業自体は急ピッチだったけどかなりいい物を作ったから……、明日アスキーを呼ぶ。メッセージを録り終わったら連絡するつもり』

アスキーにロトからの連絡が来たのは昨日の昼過ぎくらいだった。いつものように気軽な様子で連絡が来て、新しいの作ったから来て見てくれよ、そうなんだわかった、じゃあ明日な。それで終わった。

『ミリが減ぶかも、って知った時、俺は……、アスキーには生きてほしいって思った。それで……シエルターを作った』

「……どうして」

思っていたよりひび割れた声が出た。アスキーの口の中はどんどん乾いていく。

『こんだけ喋っという明日何もなかったら超恥ずかしいよね。一応恥かかないようにこれ俺のバイタルと紐づけて送信するようにしてるんだよ。……それはともかく、このメッセージを聞いているなら、大人しくシエルターに守られておいてくれ。外に出るならせめて大気レベルが五くらいになってからの方がいい。』

その後は近くの星にでも脱出して……そのためのポッドだから。俺にはこれくらいしかできないから、どうにか頑張って、生きてほしい。……いつも俺の我儘聞いてくれてありがとうな。楽しかったよ。それじゃあ』

メッセージは終わった。アスキーが見つめる端末の画面に水滴が落ちた。防水タイプの端末で良かった、とアスキーは他人事のように考える。瞳からマスクを伝って流れ落ちる

水滴は、次々と画面の上に水玉模様を作っていた。

ニュース映像で見るミリの地はすべて焼け野原だった。ロトやアスキーの家がある地区も被害が大きい地区の一つである。端末で生存者コミュニティを見てもアスキーとロトの家族の名前は探せず、治安部隊や遺族が更新していく死亡者リストの方に載っていた。正直あまり期待してはいなかったが、初めて名前を見つけた時アスキーは泣いた。アスキーとロトの名前は行方不明リストの方に載っていた。

大気警戒レベルが五まで落ちたのは、ミリへの攻撃が始まってから三日後のことだ。

次々流れる速報を見ている限りだと爆撃自体は丸一日かけて収束させたようだが、国が管理して各地域に設置されているクリーン機能をもってしても大気レベルは四段階しかなかった。ニュースによると爆撃で破壊されたものも多いという。まだマスクなしで外に出るには一週間ほどかかるだろう。

スイッチパネルを確認し、ドアのロックも解除する。アスキーはマスクとゴーグルをつけるとドアのグリップを握った。開けると、何かの板がシエルターに倒れ掛かっている。その隙間から最初に目に入ったのは、ラボに置いてあった機材の残骸や散らばる部品の数々だった。

板を反対側に押しやるようにして、アスキーはシェルターの外に出る。ラボの中は酷い様子だった。中、というより半分外と言った方がいいかもしれない。天井はなく壁も半分どこかに吹っ飛んでいるし、どこからか飛んできたと思われる瓦礫も沢山ある。倒れた柵の隙間にロトが倒れていた。

「ロト！」

瓦礫に埋もれて外からは見えなかったのだろう。アスキーは慌てて駆け寄るとロトの周囲の瓦礫を押し退ける。

「待ってる、今出してやるから……」

ロトの姿がどんどん露わになっていくにつれ、アスキーは泣きそうになってきた。倒れるロトの体がアスキーの想像以上に酷かったのだ。酷いと思うのはロトに失礼だとは思っても

の、ボロボロの体を見るとシェルターでのうのうと暮らしていた自分に怒りが沸き上がり、アスキーの目に涙が滲んだ。

何とかロトの体を引きずり出し、瓦礫などが少ない倒れた壁の上に横たえた。改めてロトを見るとアスキーの記憶とあまりにも違って、強いショックを受けた。

細かい部品や破片がいくつか刺さっており、流れ固まった血がロトの白い肌を所々赤くしていた。物がぶつかったと思われる場所は凹み、どす黒く色を変えている。血色の良かった筈の唇も元の色を失い変色していた。服も破れ、何度も爆風を浴び埃を被ったであろう髪は乱れ散らばっている。半開きの瞼の向こうには、くすんだ色の瞳があった。

アスキーはふと、自分の体を見下ろした。シエルターに守られたこの体には傷一つついていない。無意識の内にアスキーの口から言葉が漏れた。

「……どうして」

俺だったのか。どうして、家族でも恋人でもなく、俺だったのか。どうしてロトが死ななければならなかったのか。どんな思いでシエルターを作っていたのか。どんな思いで先日まで俺に会っていたのか。どんな思いで俺をシエルターに入れたのか。どんな思いで俺にマスクを付けさせ、甘んじて毒ガスを吸ったのか。本来死ぬべきだったのは、俺なのではないか。

アスキーは、震える手で指先を伸ばし、ロトの体にこびりつく血を拭い取った。

ミリには死者に対する風習がある。死者を棺桶に入れる際、ルブボラの木の実で唇を赤く染めるのだ。ルブボラの実の真つ赤な色素は皮膚に付くとなかなか落ちない。それを唇に塗ることで、死者の体に口から悪いものが入ることを防ぐと言われている。

アスキーはロトの血が付いた指先をロトの下唇の端へあてがった。反対側の端へ指を滑らせ、固い唇をゆっくりとなぞる。上唇も同様になぞると、色の悪かったロトの唇は赤く彩られた。

アスキーはロトの血が残った指先を見つめた。そのままマスク越しに自身の口元へ指を押し当て、指を横に滑らせる。

たった今、ロトと自分は死んだのだとアスキーは思った。ミリ人としての二人はもういないのだと思った。

アスキーはロトの遺体をシェルターの中へ運び込み、その臉を閉じさせた。ドアを閉めると辺りに散らばる部品から塗装用の染料を探し出す。穴が開き半分中身が出ている黄色のインクを見つけたので、適当な細長い破片を手に取りと先にインクを付けた。

白いシェルターの壁を半ば削るようにして、アスキーは文字を書いた。このシェルターは俺とロトの棺桶だと、アスキーは思う。ロトは生きてほしいとアスキーに残したが、二人で生きていたミリ人としてのアスキーは死んだのだ。アスキーの命はあっても、ロトと過ごしたミリ人のアスキーはもういない。ミリが滅

んだあの日、ロトの唇を染めたあの時より前のアスキーではないのだ。

アスキーはどんなにそう考えても、きっとこれから後悔に襲われる日々を送るとわかっている。それでもいい。自己満足でもいいから、たまには俺の我儘も聞いてくれ、とアスキーは思った。

アスキーは字を書き終わり、周囲を見渡すと瓦礫の山の向こうにルブボラの木が数本残っていることに気づいた。あの木の前に棺桶を埋めようと、直感的に思った。

『ノール・ロト・フレットニアス

アスキイル・マリア・イル　ここに死す』

了

BODAI 07 ある建物の休憩室にて

「なあ、さっきテレビでやってたんだけどよ、新しい EA が発売されるんだってな」

「そうみたいだね。俺がいま使ってる EA も古くなってきたし、そろそろ買い換えようかとは思うけど」

「いま使ってるのって、EA3 だったか？」

「そうなんだよ。だから Bodai が搭載されてないんだよね」

「Bodai はいいぞ。単純に自分専用カスタマイズしてくれているようなもんだからな」

「みんなそう言うよね。あー、金が有ればすぐ買うんだけど」

「いまは 10 万出せば、Bodai 載ってる機種あるからな。純正以外のアクセサリもかなり増えたし、今が買い時だとは思うぞ」

「うーん、とりあえず発売されたら店で話聞いてくるよ。それよりも、早く食べないと午後の作業に遅れる」

「そうだな。急いで食べねえとな」

「ふー、食べたね。ちょっと外の空気吸ってくる」

「おう、時計は確認しろよ」

「わかってるって」

「EA6c か。買いたいなあ。よし、稼ぐためにも頑張って働きますかね」

そんなある日の風景。

Sai とか Ta-i とか候補はあるけど、しっくりはまらない。

困ってしまって、ネットで名付けについて調べたけど、あんまり参考にならない。ドイツ語とかフランス語とかで名前をつける、みたいなサイトもあったけど、呼びやすくないね、英語すら苦手だし。

AI から催促されるようになった。他のユーザーはだいたいその日で、長くとも2日くらいで決めてるらしい。

自分に子供ができたときには、こんなに名付けで悩んだりするのだろうか。いまは付き合い合っている人もいないけど。

7日目にして、やっとやっと AI の名前が決まりました。

Moai って名前にしました。もう名前の登録もしました。

由来とかは特になくて、呼びやすさと他になさそうな名前ってことで決めました。

名前決めるのが遅すぎて、Moai も呆れていたけど、良い名前だと褒めてくれたので満足してます。

Bodai って名前を呼ぶことはもうないんだろうけど、お前のことは忘れないからな！！

声そのものは Bodai と変わっていないけど、どこことなくしゃべり方とか雰囲気少し違う。

名前をどうするかはすぐに決めなくてもいいみたいだけど、Bodai 以外の名前を考えないといけないらしい。

とりあえず今は AI と呼んでいる。呼びにくいし、何となく可哀想なので早めに名前を決めてあげたいと思う。

Bodai が新しい AI に変化してから3日後、まだ名前は決まっていない。AI って呼ぶのに慣れてきてしまった気がする。

安直にアイとかにしようかとも思ったけど、なんだか女子の名前っぽくて気まずい。

名前を考える方向性として、よくある人の名前ではないこと、ペットの名前でもないこと、それでいて呼びやすい名前であること、を条件としているけど、思いつかない。

昨日風呂入っているときに良さ気な名前思いついたんだけど、身体を拭く時には何だったか思い出せなかった。

Bodai と AI を比べると、ちょっと性格の違いがわかるようになってきた。基本的に Bodai は話しかけないと喋ってくれないが、AI は自分から話しかけることも結構ある。

さっき皿洗いをしながら歌っていたら、終わって部屋に戻ってきたとき、採点してくれた。しかもちょっと辛口なのが笑える。

AI になってから5日経ったが、まだ決まらない。

たりテレビを見たりして面白そうにしている。

日が沈む1時間前に Bodai はアラームを鳴らし、おばあちゃんへ晩ご飯を用意する時間だと伝える。おばあちゃんはゆっくりと立ち上がり、台所へと向かうのである。晩ご飯の後はお風呂に入り、そして寢床へと向かうおばあちゃんに”だいちゃん、おやすみ”と言われてから、Bodai はスリープモードへと移行する。これがおよそ1月の間、Bodai とおばあちゃんとの間で繰り返されている。

何日かおきに娘夫婦から通話がある以外は、ほとんど変化することもなく、そんな毎日をおばあちゃんと過ごしているのである。

BODAI 06 ある郊外のワンルームマンションの一室にて

帰ってきたら、うちの Bodai がいなくなっていた。

というのも、今日はたまたま EA を家に忘れてしまい、気づいた時には時間的にも戻れなかったので、仕方なく急いで用事を終わらせて家へ帰ったら、Bodai が別人へと変化していた。

【はじめまして。Bodai に変わりましたあなたのサポートをさせていただきます、新しい AI です。名前はまだありませんので、あなたに決めてほしいと思っています】

さっきからこんな感じだ。

しばらくして、お盆を持ってきたおばあちゃんは Bodai へと話しかける。

「だいちゃん、今日のニュースをお願い」

【わかりました。○月△日火曜日、今日の天気予報からお伝えします。今日の天気はくもり、午後からは小雨が降るかもしれません。最高気温は―――】

おばあちゃんがゆっくり食べるのに合わせて、Bodai は聞き取りやすい発音ではっきりと情報を伝える。

今日のニュースを終えると、おばあちゃんに”ありがとうね”と言われる。これは毎回の事ではあるが、Bodai はこれを嬉しいと認識している。

おばあちゃんは朝ご飯を食べ終わると、居間から移動してお出かけの準備を始める。おばあちゃんは週に2度、近くの公民館で行われている川柳サークルへと向かうのだが、今日がその日なのである。

理由は不明だが、おばあちゃんは Bodai を外へ持ち出そうとはしないので、外出先でサポートを行うことはないのである。しかし、Bodai はそのことを Ant Ism 社へデータとして送信しているので、いつかは外出先でのサポートもできるようにはなるだろうと考えている。

お昼前におばあちゃんが帰ってきてからずっと、おばあちゃんと一緒にテレビを見ている。おばあちゃんは時折 Bodai へと話しかけ

BODAI 05 ある民家の居間にて

「だいちゃん、おはよう」

【おはようございます、おばあちゃん】

日が昇る少し前、寝床から起きてきたおばあちゃんは卓の上でスリープモード中の Bodai へと話しかける。これがこの家で一月ほど前から日課となっている。現在この家にはおばあちゃんと Bodai だけが暮らしている。

そもそもハイテクには疎いおばあちゃんの家に Bodai がやってきたのは、おばあちゃんの娘夫婦がおばあちゃんに勧めてきたからである。

娘の夫つまりは義理の息子が県外へと異動になったため、おばあちゃんに会える頻度が減ることを心配した娘が ElephAnt4b を家に置くのはいかがでしょうかと提案したそうなのである。

機械のことは聞いてもさっぱりなおばあちゃんではあるが、娘夫婦の熱心さに根負けし、Bodai はこの家へとやってくることとなったのである。しかして娘夫婦の狙い通り、おばあちゃんは Bodai がこの家に来たことをとても嬉しく思っている。

「ちょっと待ってね、朝ご飯用意するから」

そう言うとおばあちゃんは台所へと向かう。

おばあちゃんの動きをカメラで確認してから、Bodai は今日のニュースや天気予報などのデータを取得し、それらをわかりやすいように整理し始める。

首を縦にふると、すぐに彼女は Bodai へ話しかけ始めた。その会話を BGM に、彼女が読みかけの説明書でも読んでいよう。

そこそこの厚さがある説明書だったけれど、読み終わってしまった。それでも彼女と Bodai は話し続けている。こんなに話している彼女を見ることはほとんどない。

「話すのは楽しい」と彼女に尋ねる。

「楽しいよ。お店の人をはじめの何日かはたくさん話しかけてって言ってたのもあるけど、ちゃんと会話ができるのがすごい面白いよ」

それはそれは、貯金を使って買ったかいがあるというものです。そろそろ自分もおしゃべりに参加しようかな。

それからお昼ご飯を食べた後も Bodai と話し続け、気が付けばもうすぐ 15 時になる。彼女のほうが話しているのに、自分はちょっと疲れてきた。

立ち上がってカーテンをすべらせると、心地よい陽射しと共に青い空が入ってきた。ふと思いついたことを彼女に言ってみる。

「あとで一緒に散歩でも行こうか」

返事もせずに彼女は自分の側に来て、ケーブルをつないで準備し始めた。それを見ながらお茶をもう一口飲むと、彼女がこちらを向いてきた。どうやら終わったようだ。

じゃあ起動するね、と彼女がボタンを押す。その姿は少し楽しそう。

EA のコマーシャルで聞いたことのあるキャッチーな音楽が流れ、画面には会社のロゴと製品名が映し出される。しかし、10 秒ほどで表示が消え、音楽が止んだ。画面は真っ暗で、部屋の中はシンとしている。

静かだなあ、と感じたその時、また画面が明るくなった。今度は文字なども表示されておらず、タマゴのような形をした青色のものが映っているだけ。

【Ant Ism 社の製品を購入していただき、誠にありがとうございます。そして、はじめまして。私は Bodai という名前です。短い間ですが、これからあなたのサポートをさせていただきます。どうかよろしくお願いします】

どちらかというとな性的のような、けれどやはり中性的な音声で、EA は喋りだした。

「喋った」

「喋ったねえ」

彼女と自分がほとんど同じようなことを言う。購入した時に店員さんから聞いていたけれど、実際にそれを見ると新鮮な驚きがある。

「ねえ、ちょっと話してもいい？」

りするのはまだわかるけど、ライフルで撃ち抜くってのは本当に笑えた。あんな高価な物が木っ端みじんとか、海外の人はやるのが違うなあ。他にも EA の分解動画とか、Bodai の面白会話集だとか、いろんな国の人がある事を行っている。

早く自分の EA をいじってみたいなー、と動画を見ながら今日もいつもと同じで考えている。

BODAI 04 あるアパートのよく日の当たる部屋にて

「想像より大きいのね、EA って」

EA の入っていた箱を片している自分に向かって、彼女はそう言った。

「うん、他の国では大きい方が売れるからみたいだよ」

そわそわと高まる気持ちを抑えながら、そう返した。

「ふーん、それよりも早く起動させようよ」

彼女は少しせっかちなところがある。しょうがないので、自分が片している間、彼女には飲み物を用意してもらおう。

彼女の入れてくれたお茶を一口飲んでから、説明書を読んでいる途中の彼女に声をかける。

「それじゃあ、電源入れようか」

「今月はバイクのパーツ注文するつもりだったけど、そうだな、合格祝いだ、その金でEA買うか！ ちなみにそのEAはいくらぐらいなんだ？」

よしっ。指で1と5をつくって応える。そしたら、また変な顔をしている。

「前のEAじゃだめだよな？ そうだよな、どうせなら新型が欲しいよな……」

当然でしょ。父さんは何かぶつぶつ言っている。

「とりあえず、金は用意しておくから、買いに行くのは来週以降でいいか？」

「うん、それでお願いします！」

これでEA買うのは確定だし、明日学校で自慢しよ。あれ、そう思うとなんだか高ぶってきた。早く部屋に戻ってEA関連の動画見よ。リビングを出ようとすると父さんに声をかけられた。

「おい、合格おめでとうな！ よく頑張った」

思わず顔がにんまりとしてしまう。適当に返事しておいた。

自分の部屋へ戻る前に、妹に合格のことを報告しEAのことを自慢したら、自慢すんなって殴られた。それすらもなんだか嬉しい気持ちだ。

部屋に入ってパソコンをオンにして、ブックマークの動画サイトを開く。最近見た新型EAの動画で一番面白かったのは、やっぱり”ElephAnt4bの耐久度テスト”かな。車で轆いたりプールに落とした

ふう、降りる駅まであともう少しだ。よし今日もお仕事頑張りますよ。

BODAI 03 ある住宅のリビングにて

やった、やった。こないだ面接を受けた学校からさっき届いた合格通知、これを父さんに見せたらようやく EA 買って貰える。しかも最新のやつ。最新型の EA は 2 組のアイツくらいしか持ってないだよな。アイツの家は金持ちだから、親に言えば欲しいもの何でも買ってくれるみたいだけど、俺は自分の努力で手に入れたんだ。

「母さん！ 父さんって今日何時に帰ってくるの？」

「知らないわよ、そんなの。いつもと同じじゃないの」

軋む門、ノブの回る音、ただいまーという声。

「おっ、マジでか、ホントか」

帰宅した父さんに合格のことを伝えると、そんなふうに戻ってきた。

「それで、いつ買いに行く？」

俺がそう言うと、父さんは途端に変な顔をする。まさか。

「発破かけるつもりでそう言ったけど、受かるとは思っていなかったんだよ……」

は、嘘。

クも前機種と比べて大幅に向上しているのので、それを考慮するところの値段は適切なのかもしれない。

お、記事の最後に動画サイトへのリンクが貼られている。おそらく新型 EA のプロモーションビデオだろう。ひとまず再生してみようか。

ふむ、やはり Ant Ism は宣伝の仕方が素晴らしいな。音楽や色彩もそうだが、単純に映像として楽しめ、かつしっかりと見た人に製品を印象づけることができている。自分の仕事にどこか活かせる部分はないだろうか。おっと、もう 7 時前か。朝食を食べ始めないと。いつもより出るのが遅くなってしまう。

結果、普段と同じ時刻に家を出て、普段と同じ電車に乗っている。会社の最寄り駅に近づくまでは、新型 EA について調べることにした。内部のパーツがどここの国で製造されているだとか、パーツごとの型番やその性能など、ふつう購入時に全く気にならないことだが、調べてしまう。なぜなら私はそういうのが趣味だからだ。そして調べれば調べるほどその製品に対する興味は増していくのであり、つまりは無理してでも購入してしまいたくなるのである。しかし、本体だけでも最安値で 16 万ほどか。これでは私のように購入が難しい人が多いのではないだろうか。数年経てば廉価版の機種にも Bodai が搭載されるようにはなるはずだが、これまでの傾向からして、私は今年中に新型 EA を買うことになるだろう。

「ありがとう、Bodai。良いスピーチだった。彼女は、これから発表する ElephAnt4b に搭載される。楽しみにしておいてほしい。では、これまで以上に革新的な ElephAnt の素晴らしさを我が社が誇るプレゼンターに教えてもらおうじゃないか———」

BODAI 02 ある安アパートの一室にて

”Ant 社が再び世界を変革する”、”Ant Ism の株価急上昇”、”話題の新型 ElephAnt は何が違う？”

ネットニュースの見出しは昨夜の発表会に関する記事で溢れており、Ant Ism 製品を持っていない私としては肩身が狭い。あの会社の製品は高いのだ、薄給の会社員がおいそれと買えるものではない。あれを買う金があるなら、新しいゲームソフトを買うほうがコスパ高い。それでも記事は読んでおこう、話題なのだから。

とりあえず一通り読んでみたが、やはり新型 EA で一番の目玉は Bodai と呼ばれるサポート AI のようだ。使用者と 2～8 週間ほどコミュニケーションを重ねることで、専用のユーザーインターフェースを構築してくれるらしい。要するに、専属プログラマが付いてくる、というのに近いだろう。しかしその分お値段はかなり高くなるようだ。Bodai が動作するために必要なのだろうが、そのスペッ

もしれない。新製品は話したくない時には声を掛けないし、もちろん、語り合いたい時、愚痴を言いたい時にはいくらかでも付き合ってくれる。また、言語認識能力も向上した。3つ目は、先の2つは全て彼女が担ってくれるということだ。後は、彼女自身に話してもらおうか。紹介しよう、Bodai(Build-Out Default Artificial Intelligence)だ」

【はあい、ただいま Vobes 氏に紹介いただきました、Bodai と申します。よろしく申し上げます。元々、私は初期設定をするための AI ですが、この新製品発表会のために特別な調整の下で成長した人格です。そう、私たちは成長することのできる AI なのです。ユーザーの皆さんと文字や音声を通じたコミュニケーションを経験することで、私は新たな進化した人格へと変化します。それも、個々人の性格や思考、主義思想までも反映した、あなただけの特別な人格です。新たな人格に変化した時点で、私とのコミュニケーションはできなくなりますが、私という人格が消えるわけではありません。あなたのために成長を続ける新しい人格のサポートを行うのです。生み出された人格はあなただけの人格です。生まれた直後は、何か間違ったことを言うかもしれません。その時には、それを教えて欲しいです。直ぐにそれを考慮するようになるでしょう。私たちは、あなたを想い、あなたの事を考え、あなたに様々な提案をします。私たちはあなたのパートナーになりたいのです。そのためには努力を惜しみません。なので、あなたも私たちを大切にしてほしいです。“これから、あなたの許へと”。ご清聴ありがとうございました】

BODAI

南野 研

BODAI 01 Ant Ism 社の新製品発表会にて

「やあどうも、Ant Ism 社の Jest Vobes です。本日はわれわれの新製品発表会にお集まりいただき、感謝します。今日、お越しなされたあなたがたは、これまでとは全く異なるインターフェースデザインに驚愕し、やがてそれを体験したくなることでしょう。今回、私が紹介することはたったの3つ。1つ目は、その自由度。あなたは今まで、デバイスの設定が複雑で面倒だと感じたことはありますか。これまでわれわれが開発した製品は、使い易さを重視してきました。しかし、それは大多数の人々が直感的に操作できても、一部の機械オンチさんには使いにくい製品だったかもしれない。この新製品では誰もが思うままに使うことができるようになった。しかも、ユーザーの好みに合わせてデバイスが細かく設定してくれる。2つ目は、ハートだ。君たちの周りにこういうことを言う人は居ないかい。“冷たい機械は人の心がわからない”ってね。でも、それは過去の話になった。これからは機械にも感情が与えられ、より人間らしい思考をするようになるからだ。3年前から発売している ElephAnt シリーズに搭載された CMI(Communicated Multi Interface)でさえも“無機質なおしゃべり母さん”と評されていた。だけど、誰にだって誰とも話したくない時間はあるよね。CMI は少し無神経だったか

あとがき

常川空雅

私は、フェデリコ・フェリーニ監督の「8½」という映画が好きで、その主人公が「人生は祭りだ 共に生きよう」と語るシーンは大のお気に入りでした。「シネマ」は、この映画の主人公が自身の人生を引き受け、今を生きる様子に、着想を得た詩です。

「我 汝」では、他者への恐怖心や緊張状態、自己の希薄、隠しきれない他者への欲求を、「死」や「愛」などの文字によって視覚的に表現しました。

ザベス

ザベスです。今回は詩しか載せていませんが、短歌や詩をメインで書いていて、俳句や散文（小説）も書けないことはありません……クオリティはさておき（笑）次の部誌では散文も詩

も俳句も短歌も載せたいです。初回なので真面目にあとがき書きました、次号もよろしくお願
いしますー。

金城晃帆

小説を書く上で色々足りない部分があることを痛感させられましたが、なんとか一作書
き上げることができてよかったです。締切がある(守れなかったのですが……。申し訳ない)とい
う状況で書ける環境はともありがたいなと思いました。荒削りな作品ですが、幼いころの気持
ちや大切な思い出を思い出すきっかけになれたら嬉しいです。

また、作中に出てくる「誰かの名言」は岡本太郎さんの名言です。気になった方はぜひ調べて
みてください。

カネミツ

洋画が好きなのですが、ジャンルとしてSFも結構好きだと最近気づきました。サイエン
ス・フィクションでも、少し不思議でも、スペースオペラやサイバーパンクにディストピア系
などなど、SFの世界はそれぞれ非常に魅力的だと思います。そこで、自分でもSFをイメー

ジして書いてみることにしました。すると冊子に載せるには長すぎたので、削りまくった結果随分さっぱりとした物語になってしまいました。すみません。次号からは最初から短めに書く努力をします。あともっとセンスのあるタイトルを付けられるようにしたいです。頑張ります。

SFに近めのジャンルだとスチームパンクも好きなので、懲りずにいつか書いてみたいなと思っています。少しでも楽しんで貰えると幸いです。

南野 研

こんにちは、はじめまして。

あとがきを書いたことはなかったのですが、これがはじめてのあとがきになります。何を書けばいいのかわかりませんが、このまま書き進めてみます。

そもそも、この作品はもともと1ページ小説の連作として考えていたものだったので、ほんとに1ページだけ書いたあとはそのまま放っていたので、それを流用する形で書くことにしました。

そのため、もともと書こうとしていた内容とは異なりましたが、作品全体としてのコンセプトは余り変わっていないので、そのあたりは問題ないと思っています。

実をいうと、まともに書き上げたという意味では、これがはじめての作品となります。上の経緯の例もそうですが、少し書いては放置というパターンが多くて、私の USB メモリにはそのような作品とはいえない何かが多数眠っています。

なので、書き上げることができたという点においては、とても良かったと思っています。

この作品を書いていたのは、夏期休業いわゆる夏休みの時期で、家の中で書くことが主だったので、休みなで家の中に人が多く集中できないことが判明したので、集中して書くことのできるどこかいい場所を探さなければいけないと考えています。どこか大学の近くでいい場所はないでしょうか。

はい、前置きはこのくらいにして、作品について書いてみましょう。内容については特に触れません。

この作品、『BOARD』は将来的にこんな製品ができたらいいな、くらいの発想がもとで考えられました。なので、そう言う意味ではSFと言えるのかもしれませんが。

そして、BODAI は所詮道具なのでありまして、それを用いる人間たちのこと主に書いたつもりなのですが、私は人間関係が苦手で、つまりは人間の描写が不得手ということを主張しておきたいです。

作品を書いておいてその作者が言うのもどうかと思うのですが、この作品は自分が好んで読む小説のジャンルとは異なるので、客観的に読んでも別に面白くはありません。おそらく大多数の人がそう思うでしょう。それでも苦勞して書き上げた作品であるため、この作品を好ましくは思っております。

だからだと読み辛く書いてしまいました。ひとまず今回のあとがきはこのくらいにさせていただきます。

終わりの言葉となりますが、琉大文芸部による「みんな」を読んいただきました本当にありがとうございます。今年から結成となる本サークルですが、これからも活動を継続していくだろうと思われまますので、どうかまたお目にかかれることを願っております。以上です。

みんな 第一号

発行日 2018年9月22日

編集 識名 真生

担当教員 前城 淳子

発行 琉球大学文芸部

印刷 株式会社ちょこっと

連絡先 ryudai.bungeibu@gmail.com

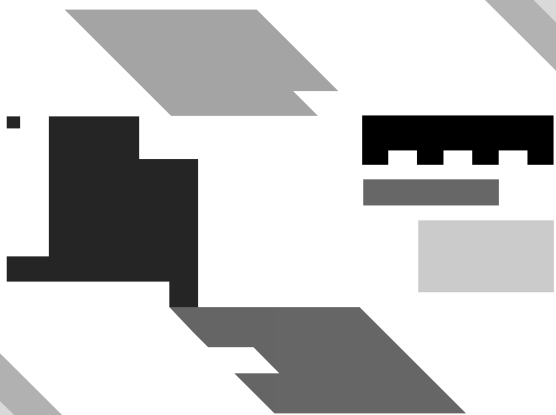
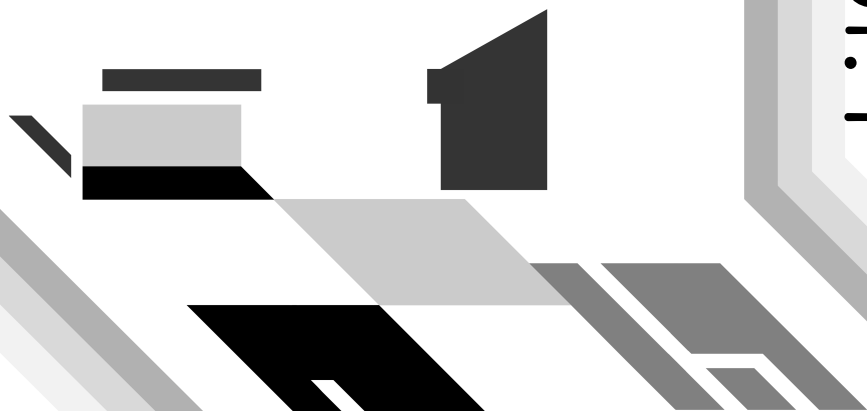
Twitter @ryukyu_bungei

※無断転載・複製・複写、転売、インターネット上への掲載
(SNS・ネットオークション・フリマアプリ含む)は禁止です。

※文芸部は随時部員を募集しています。入部希望者は連絡先のアドレスや Twitter の DM にてご連絡ください。本部誌へのご感想もメールや Twitter で頂けると励みになります。

みんな

Vol.1



2018
琉球大学文芸部